

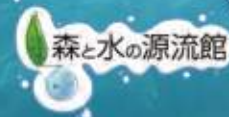
思いをつなぐ川

～吉野川紀の川流域人絵図～



奈良県川上村

〒639-3594 奈良県吉野郡川上村大字迫1335-7
TEL 0746-52-0111 FAX 0746-52-0345
<http://www.vill.kawakami.nara.jp/>



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平
TEL 0746-52-0888 FAX 0746-52-0388
<http://www.genryuu.or.jp/>



「源流」とは、水の流れの始まりを意味します。

水の届くところ、受ける人があってこそ「源流」です。

流れていく先々には、たくさんの人と物語があります。

場所は違えども、吉野川紀の川という同じ流れでつながり

その時々、さまざまなテーマで交流し、互いを高めあう仲間たちです。

そんな仲間たちへの感謝の気持ちをこめて

「吉野川・紀の川流域人絵図」をまとめました。

川上宣言

1996年、川上村は「樹と水と人の共生」を目指して、
全国に向けて「川上宣言」を発信し、「水源地の村づくり」に取り組んできました。

- 一 私たち川上は、かけがえのない水がつくられる場に暮らすものとして、下流にはいつもきれいな水を流します。
- 一 私たち川上は、自然と一体となった産業を育て山と水を守り、都市にはない豊かな生活を築きます。
- 一 私たち川上は、都市や平野部の人たちにも、川上の豊かな自然の価値に触れ合ってもらえるような仕組みづくりに励みます。
- 一 私たち川上は、これから育つ子どもたちが、自然の生命の躍動に素直に感動できるような場をつくります。
- 一 私たち川上は、川上における自然とのつきあいが、地球環境に対する人類の働きかけの、素晴らしい見本になるよう努めます。

もくじ

始	プロローグ	P1~2
図	吉野川紀の川流域地図	P3~4
伝	川の命を育てる「山」	P5~6
海	しらすが良いのは「川」のおかげ	P7~8
食	農業を守る「水」	P9~10
食	おかげ米	P11
守	和歌山市民の森づくり	P12
学	川がつなぐ“村”と“まち”	P13~14
集	源流まつり	P15~16
交	つながり感じて思い新たに	P17~18

掲載の内容は2014年取材当時のものです。

奈良県

和歌山県

吉野川 紀の川 流域地図

大台ヶ原に降った雨は「水源地の森」に蓄えられ、吉野川になって流れ出し、多くの支流を集めながら、紀の川となって和歌山の海へと注いでいます。距離にして136kmの「水の旅」。水は、人々の暮らしを支え、地域の歴史や文化を育んできました。川の流れのように、源流、上流、中流、下流に暮らす人たちの「思い」もつながっていきます。





川の命を育てる「山」

ネイチャー・フォトグラファー

内山りゅう

驚きが沢山の森との出会い

川上村は、トガサワラの原生林があることで以前から知っていましたが、2年前に村で講演を行うことになり、初めて三之公の「水源地の森」へ行きました。500年近く手つかずの森があることに驚きました。



私は、淡水の生き物を撮影していますが、その生き物を見るなかで基軸になるのが水です。そこから源流に興味を持ち、山へ行くようになりました。和歌山県の話ですが国有林はわずか5%、ほとんどがスギやヒノキが植林された民有林で、自然林は少ない状態です。「水源地の森」のすべてを見たわけではありませんが、シオジやサワグルミなどの300年クラスの木があり、豊かな森に衝撃を受けました。ここを見ることで、かつて何百年前の紀伊半島を想像することができる、本当に貴重な場所です。

体感できる素晴らしい環境

早い段階で、村として手つかずの原生林を買い取って残してきたことはすごいことで、今こそ水源地を購入する自治体や企業もありますが、あの当時では川上村の行動は先進的なのだと思います。木は1回切ってしまったら、植えても元に戻らないんですよね。育つのに数十年はかかります。だからこそ、源流の村としての思いというか、覚悟を感じます。

十数年前から生き物を撮影していると、生き物の背景にある水、すなわち環境にも目がいくようになりました。撮影で透明度の高い川へ行くのですが、源流が気になりいろいろと調べてみると、近隣の良い川も実は同じ山が源流だったということがあります。山がきちんと残っていないと川はダメになり、川の命は山だということを知りました。

今、源流の川上村と河口の和歌山市が、それぞれの文化を体験する交流を行っていますが、こういうつながりが、水に興味を持つきっかけになるのではないのでしょうか。源流から河口まで車で約2時間という身近な環境をもっと生かし、子どもたちだけでなく、水の文化交流がもっと広がっていったらと思っています。川上村の源流には、体感できる素晴らしい環境があるのですから。



Profile うちやまりゅう

1962年東京生まれ。東海大学海洋学部水産学科卒業。水に関わる生き物とその環境の撮影がライフワーク。とくに淡水にこだわり、図鑑や写真集などを精力的に発表している。

<http://uchiyamaryu.com/>

海

「川」のおかげが良いのは

しらす漁師
和歌浦漁業協同組合理事
高井 宏

場所によって透明度が・・・

和歌浦湾で獲れるしらすは、高級品といわれています。抜群に透明度が高く、生の状態でもだいぶっぼいんです。大阪湾や瀬戸内海で獲れたものと見比べたら素人でも分かるほど、一目瞭然です。和歌山と大阪、船を走らせたなら40分ぐらいの距離。海はつながっているのに、片方では透明、もう片方では赤黒かったり、青かったり、と全然違う。不思議な話です。



海は川から流れてくるものの受け口

しらすは、カタクチイワシの稚魚で、プランクトンを食べて育ちます。甲殻類のものや、植物性のもの、動物性のもの、いろいろな種類のプランクトンを食べていますが、違いはそのエサにあるといわれています。和歌山県水産試験場でしらすを研究している人に話を聞いたのですが、体をつくるタンパク質の成分が、大阪と和歌山ではすいぶん違うそうです。大阪の海は、栄養分がたっぷりある、つまり汚いということですが、栄養分が多いところだと成長が早い。和歌山では海がきれい過ぎて、ゆっくり育つ、その違いが、しらすの品質の違いになるそうです。まさしく自然がそのまま反映されているんだと思います。私たちの漁場は紀の川の河口に最も近く、和歌浦湾のしらすの品質が良いのは、きれいな川のおかげと思っています。

普段から川を意識することは少ないのですが、台風の際には、たくさんの流木やごみが一気に流れてきて、川と海の間をつなぐを実感します。流れて来たものは海で回収しないとイケません。海は川から流れてくるものの受け口。源流が荒れてくると、海にもつながってきます。10年ほど前から、県知事に認定された漁業士たちで、荒れた山を整備して植林しようという「漁民の森づくり」の活動を行っています。岩出市などにある2カ所の山を借り、下草刈りなどを行い、ある程度の山になるまで関わっています。みんなで一緒にしていると「山の仕事はしんどいな、大変やなあ」と言いながら。いつか漁師と山師さんの交流があっても面白いなあと思っています。しらす漁は1~3月がオフ。その時期に漁師が林業や農業で働き、反対にしらす漁の最盛期の4~5月は林業や農業の人が手伝いに来てくれる、そんなつながりができたらいいですね。



Profile たかい ひろし

1965年和歌山生まれ。しらす漁をしていた伯父が亡くなり、30歳の時に跡を継ぎ、会社員から漁師へ転職。週に4回、早朝から15時まで、「網代丸」に乗って漁に出る。和歌浦漁港近くで「高井商店」を経営。しらす漁に出た時はここでしらすを買うことができる。溪流釣り、山登りが趣味。



農業を守る「水」



紀ノ川農業協同組合 組合長

宇田 篤弘

安心、安全な農産物を町へ

紀ノ川農業協同組合は、紀の川(吉野川)の中流域で農業を行い、生協との提携によって都市部を中心に全国へ供給している団体で、約930名の組合員がいます。その8割が紀の川流域の方々です。安心、安全な農産物がほしいという消費者の願いを生産者が受け止め、農業や化学肥料を減らすなどをして38年間取り組んできました。当時はミカンだけでしたが、いまやトマトやキュウリ、キウイ、玉ねぎなどいろいろ出荷しています。



源流を守る人との出会い

10数年前から有機農業を始めるようになったことから、和歌山環境ネットワークのイベントに出るようになり、川上村の森と水の源流館と交流が始まりました。それまでは紀の川の源流について考えたことはなく、事務局の尾上さんと知り合って、初めて源流の人たちが下流にきれいな水を流そうと宣言し、取り組みを行っていることを知りました。そして水源地の森にも驚きました。ほとんどが植林された管理された森ばかりだと思っていたので、こういう森が守られていたことに地域の人たちの思いを感じました。

環境を守りながら作った農作物をPR

農業は水がなかったら持続できません。紀の川だけでなく、天川村からきている紀の川用水もあります。江戸時代には、水の問題で近隣の集落同士がいがみ合っていた記録も残るほどです。そんなこともあり、紀の川市にはため池が700ほどあります。集落の水路やため池の管理はそれぞれの地域の人たちで共同作業を行い、管理していますが、高齢化や担い手の減少で水路清掃も崩壊してきています。もちろん耕作放棄も増えています。生産者だけでは支えきれないのが現状で、消費者と生産者の在り方自体を考え直す時代がきていると思います。消費者の方は安心、安全な農産物を選択する。買うということではなくて利用する、投資するということで、安定した販路ができ、それが安心安全の農産物を作る担い手の育成につながる。そういう関係が少しずつですが、生まれてきています。

そうやって環境を守りながら作った農作物を持って、いろいろなイベントに行ってお知らせしています。そういう人たちにこそ水源地の森を見てほしい。大切にしたいと思うような気持ちになる、それが大事ではないでしょうか。そういうつながりをどんどんつづけていけたらと思っています。



Profile うだ あつひろ

1958年生まれ。立命館大学産業社会学部卒業後、紀ノ川農協に就職。職員から常勤役員を経て、1997年に組合長に就任。紀の川市農業委員、和歌山有機認証協会理事。自宅では、有機JAS玉ねぎやお米を栽培している。



水がつなぐ 大和平野との交流 「おかげ米」



「水源地の森」で生まれた水は、吉野川紀の川を通じて、いろんな人の元へ旅をします。吉野川分水もその1つ。大淀町にある「下淵頭首工」から、奈良県中北部にある大和平野へと水は送られています。大和平野は年間1300ミリ程度と、全国的に降雨量が少ない地域で、古くからため池や周辺の川の水で米を作っていました。吉野川分水の話は江戸時代から何度も持ち上がったものの、実現には至らず、1987年に全ての事業が完了し、大和平野の農業の発展につながりました。

大和平野に安定的に供給される農業用水への感謝をこめて、2011年11月26日、大和平野土地改良区より川上村へおかげ米が増呈。これは大和平野に安定的に供給される農業用水で営農できていることへの感謝の気持ちから企画されたもので、これをきっかけに「水のつながりプロジェクト」が発足。さらなる友好関係が育まれています。

「水のつながりプロジェクト」では小学生や家族づれで田植え体験や清流での体験などを通して吉野川分水を学び、水の大切さや地域のつながりを感じています。



11年目を迎える 「和歌山市民の 森づくり」

暮らしと生命に欠かせない水が、源流からきれいで豊かに流れ続けることを願い、吉野川紀の川の下流にある和歌山市と、水源地の川上村は、2003年「水源地保護に関する協定書」を結び、翌年から、和歌山市民の人たちによる森づくりが始まりました。水源地の森の対岸には、伐採の後、放置され鬱蒼とした二次林の民有林34haがあり、ここを川上村が借り受け、森林環境の体験学習のフィールドとして活用しています。

和歌山市民は、このうちの3haを借りて、年に2回、市民による育林作業の体験と管理作業の委託を行っています。除伐により林床に光を入れ、下草を育て保水力のある森を再生しようとする取り組みで、始めたころは、急峻な斜面から土砂の流出が苦しかったものが、ブロによる管理作業とともに、のべ400名を超える継続的な市民の参加によって、林内では下層植生が生育するなど、表土の流出を止める一定の成果が現れてきています。

また和歌山市民のすべての議員で構成される「森林環境保全促進和歌山市民議員連盟」は、紀の川流域に暮らしの場として、水源を守る川上村に思いを寄せ、連携・協力の具現化を目指し、これまでに水源地保護の啓発物の作成や、「和歌山市民の森」周辺の法面崩壊対策措置へ協力くださっています。





川がつなぐ“村”と“まち”



14年つづく、川上小と加太小の交流

吉野川・紀の川の源流から河口まで約136km。「1本の川」のつながりを実感してもらうために、2001年から吉野川の水源地にある川上小学校と、下流域にある和歌山市立加太小学校の交流が始まりました。

加太小学校の子どもたちは川上村へ、そして川上小学校の子どもたちは和歌山市加太へ。同じ川といえども源流、上流、中流、下流では、川の様子はまったく違います。源流では透き通る川の水の美しさ、冷たさを感じ、下流では河口の広さ、川や海の様子を知る。お互いが行き来し、体感することで、よりいっそう森や水への理解を深め、川のつながりを実感する取り組みです。

加太小学校の松下太校長は、「加太小は和歌山市の一番端にあり、河口地域ではありませんが、海でつながっています。子どもたちは川上村へ来たことで、川の水が冷たいこと、流れがあることを初めて知り、海との違いに気づきます。そして、見上げたらこの水を守る大きな木や森があります。それらを五感をとおして実感することが、教室で学んだ知識と相まって子どもたちの記憶になっていくのだと思います。川がつないで



くれた交流をこれからもつづけていきたいです」と話します。

川の流れをたどり、現状を学ぶことで、水のつながりを実感する。蛇口をひねれば出てくる水は、大切に守られた森から生み出されてきたことを、川がつなぐ“村”と“まち”の交流は、これからも続いていきます。



和歌山市立雄湊小学校

体験や川のつながりを絵巻物に

紀の川(吉野川)の河口が見える場所にある和歌山市立雄湊小学校でも、源流を学ぼうと、2010年度から川上村との交流を行っています。子どもたちは、事前に川上村の人口や林業について学んでから、川上村を訪問。当日は源流を生み出す「水源地の森」の原生林や、原生林の伐採跡地をめぐり、森の大切さを実感し、森と水の源流館で理解を深めました。その体験を絵と文章で表し、絵巻物をつくった子どもたちは「こんなにゆっくりで小さい一滴目ののに、吉野川紀の川という大きな川になることを知って、とてもおもしろかったです。水の大切さを学びました」、「木を切ってしまった所に行って、土砂くずれをしてしまった所を見て「自然を大切に」の言葉の意味がもっと分かりました」との感想も。川が結ぶ“村”と“まち”がどんどん広がっていきます。



集

源流まつり

人と人をつなぐ 「吉野川・紀の川源流まつり」

水源地の森で生まれた水が集まり、源流となって吉野川紀の川へと流れ出す。その川と水の恵みに感謝しようと、毎年9月に吉野川紀の川の流域の人たちが、水源地の村の川上村に集まり、特産品の販売や体験イベントを通じて、水環境の保全活動の啓発をしています。2002年の「吉野川紀の川ふれあいデー」から始まり、今年で13回目。1つの川の源流と中流と下流を結ぶイベントによって地域と地域、人と人がどんどんつながっています。



毎年、長野県川上村から新鮮野菜を取り寄せ、水環境保全のためのチャリティー販売を実施

NPO法人奈良21世紀フォーラム 理事 大辻 康夫

NPO法人奈良21世紀フォーラムが、森と水の源流館のお手伝いをするようになって10年以上が過ぎました。私は川上村で生まれ育ち、18歳のとき、進学のために東京へ出ましたが、いつも心にあっただのは、ふるさとのきれいな川でした。その思いが活動の原点になっています。21世紀の環境問題の最大焦点は、大規模な森林破壊がもたらす地球の温暖化と水不足、それにとまらぬ食糧難といわれていますが、私たちの身近な吉野でも森林が荒廃し始め、水源涵養(かんよう)の機能が低下しています。この水は上流域、中流域、下流域だけでなく、大和平野にも多大な影響を与えています。川上村は水源地の村として公費で私有林を買い上げ、独自に水源林の保護に乗り出しました。偶然にも大和平野の農家の方が、「吉野川の分水をもらえるようになって、おいしい米がつかれるようになった」と喜んで話を聞く機会がありました。水を守るだけでなく、川上村では「川上宣言」をつくり、下流にはいつもきれいな水を流すと宣言しているのです。村の取り組みを誇りに思います。木や森が元気だからこそ、水がきれい、豊かになっていく。今後もイベントを通じて、次世代へとしっかりと伝えていきたいと思っています。



初桜酒造株式会社 取締役社長 笠勝 清人

北にかつらぎ山脈、南に紀の川が流れる伏流水の豊富なところで、1866年(慶応2年)から酒造りを行っています。昔はこの紀の川を利用して、江戸まで運ばれていました。川上村との交流が始まったのは、吉野川紀の川の流域交流のイベントへの出店の依頼で、森と水の源流館の職員が訪れてくださったのが始まりでした。吉野へは行く機会があっても、川上村へは行ったことがなく、源流の取り組みを初めて知りました。私たちは水を当たり前のように使っていますが、日本の水は安全で無料ということはとても有難いこと。活動を通じて、より実感しますね。

不思議なことに、昔、和歌山城から見て橋本から粉河のあたりを「川上」と呼ばれていて、当時、盛んだった酒や木綿にその名が残ります。私たちも「川上酒」という名称のお酒を造っています。見る場所によって、上流はすべて「川上」なんですよ。あらためて川のつながりを感じました。今は紀の川との直接的な関わりはありませんが、今後もイベントなど、活動に関わっていただけたらと思っています。





↑玉ねぎの有機農家を訪問



↑桃ジャムづくりを体験

つながり感じて思い新たに

「水源地の森」を守る決意

川上村が、吉野川紀の川の源流となる「水源地の森」を守ろうと決意したのは、今から20年前の1994年のこと。吉野林業発祥の地である川上村には、スギやヒノキがきれいに植林されており、そして、その奥地の源流部には手つかずの原生林が500年以上も昔からの姿で残されていました。その敷地は約740ha、何と東京ドーム157個分です。川上村はこの貴重な森を守ろうと約10億円投じて「水源地の森」として購入しました。その思いは「川上宣言」となり、源流で暮らすものとして、下流にはいつもきれいな水を流し続けることを決めたのです。

「村民」の交流を広げる

2009年には、川上村独自の環境基本条例を定め、それに基づく環境基本計画を制定。その活動の一環として、源流の住民が中下流域地域を訪ね、水のつながりを実感する体験学習を毎年1回、開催しています。今までに「華岡青洲の里と紀ノ川農協直販所、たまねぎ農家を訪ねる」(紀の川市)、「有機食材レストランや紀三井寺の名水を訪ねる」(和歌山市)、「桃の産地を訪ねてジャム作りと地元女性グループのふれあい」(紀の川市)、「大和平野の農業と新米と、とれたて野菜」(大和平野土地改良区)、「和歌浦漁協を訪ね、森と海のつながりをおもう」(和歌山市)を開催、

地元の方々と交流を深めました。桃のジャムづくりの交流会では、生産者からは「汚れた水だと、桃の木が病気になったり、枯れたりしますが、いつもきれいな水だから安心しています」との感謝の言葉に、参加者は「川上に住む者としてきれいな水を流す責任を感じました」と、水への思いを新たにしました。直接、話を聞くことで自分たちが流す1滴の水が、下流に住む人たちへの1滴の水につながっていることを実感したのです。この交流は「流域学習会」として、今後も続けていくそうです。

「職員」の視野を広げる

また川上村にある各機関・施設では、光熱費や消耗品の使用を見直し、地球温暖化防止の行動目標を立てて実行し、常にチェックしながら、継続していく取り組みをしています。そして環境基本計画をより効果的にするためにワークショップを開催したり、流域の関係者との交流を通じて、源流としての役割を考える機会を設けています。

20年前の川上村の決意は、それぞれの人たちの行動につながり、そして少しずつ広がりを見せています。



↑和歌山市加納浄水場での川上村の職員研修

源流から海まで 第1次産業をつなぐ川

本誌編集に先立ち、吉野川紀の川源流フォーラムと題し座談会が開催されました。

本誌で紹介の高井宏氏と宇田篤弘氏、そして川上村から吉野杉を使った樽の部材を加工している春増薫氏の3名です。林業、農業、漁業、それぞれの仕事のフィールドは、吉野川紀の川でつながっています。決して大都市へ流れ出す川ではありませんが、どこまでいっても、第一次産業という昔から人にとって最も身近で不可欠な生業に対して、今も恵みを届け続ける川です。3名の方々からは、水の大切さとともに、近年のさまざまな危機感が語られました。どのように協力すれば、上流・中流・下流、すなわち林業・農業・漁業がよくなることができるか。結論には至りませんでした。この座談会での出会いを引き続き、つなげていくことを約束しました。

この「流域人絵巻」では、ほんの一部の人しか紹介できませんでした。これからも、相互の力となって課題に立ち向かえるような真の流域連携と交流を続けながら、さらに多くのテーマと仲間を広げたいと思っています。流域のみなさま、どうぞよろしくお願いします。

「第5回全国源流サミット in 奈良県川上村」
「第34回全国豊かな海づくり大会～やまと～ 故郷・歓迎行事」に寄せて
2014年9月発行

発行 公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
企画制作 尾上 忠大 (事務局長)
編集 西久保 智美 (理事、コミュニティライター)
2018年2月1日 5刷